

## 「恋愛小説における日本的なロマン」

～ハッピーエンドとは何か～

### アイリーン B. マイカルス・アダチ

世界文学史を辿ると、恋愛は古くから読者を引き寄せるテーマの一つであり、現在に至るまでもその主題を用いる作家が多い。日本文学の場合も同様で、古典によく見られるテーマであり、言うまでもなく『源氏物語』はその代表的な例である。そしてまた、現代文学の中に恋愛小説というカテゴリーまで生まれ、「恋愛」という言葉自体が流行語のようなものとなっている。そのために、最近、文学作品だけではなく、あらゆる文化的なアリーナ、すなわち、映画、ドラマ、歌などにもその要素が表れている。このように「恋愛」は時間、または分野を超える普遍性を示すテーマであるが、描き方によってそれぞれの国の独自のなもの、あるいは国民性も表されるとも言えよう。小論では『恋愛小説』という短編集を観察しながら、その中に表される日本的なものを追求する。

しかし、現代日本ではいわゆる恋愛小説というカテゴリーが出来たとと言っても、文学ジャンルとしてまだ定義されていないようである。それは大衆文学として評価されている作品が多いためであろうが、大衆文学のラベルが貼られるにも関わらず、恋愛小説は日本現代文化を代表するものの一つでもあると言える。なぜならば、『古典とゴミ、純文学と大衆文学』の中にハリエット・ホーキンスが言うように「芸術的なもの」つまり、「後援者（文学の場合は読者）に要求されるものを与えるだけではなく、文化で作られるものでありながら、文化を作るもの」<sup>1</sup>でもあるからである。そこで、今まで海外で紹介されてきた日本文学は古典や新古典的な作品が多かったことを考えると、

『新・日本文化における誤解される七つのステレオタイプ』に書かれているように「今までの研究で作られた日本人像、またはその文化のイメージは現在の若い世代に不適當である」<sup>2</sup>ようである。言い換えれば、新しい研究対象が必要であることが確かである。それは「新日本」つまり、今の時代のもを考察しないと、日本文学研究者、ジョン・ウイティア・トリート氏が指摘するように「日本文化を完全に理解が出来ない」<sup>3</sup>からである。従って、昔と異なる新日本の社会を描く恋愛小説は日本文化研究において重要な対象の一つであると思われる。

と言っても定義されていないジャンルを批評するのは確かに難しい面もある。そこで三十年近い歴史を持つ、そして基準がはっきりしている西洋の現代ロマンス小説を参考にしながら、考えたいと思う。それは日本の現代恋愛小説も西洋の現代ロマンス小説も「恋愛」という普遍的な概念を中心として描かれるだけではなく、他に共通点があるかどうか、またはその相違点について興味深いからである。

従って、西洋の現代ロマンス小説について少し述べると、アメリカには10,000人以上のメンバーを誇りとするロマンスライター協会が成立し、メンバーシップは、アメリカに住んでいる人に限らず、外国にメンバーが900人ぐらいいるようである。そのロマンスライター協会によって、

あらゆるロマンス小説は二つの基本的な要素から成り立っている。それは主要なラブストーリーと感情的なレベルで満足するような

楽観的な結末である。そのラブストーリーの本筋は、二人（男女）は恋に落ちていて、色々と苦労しながら、ストーリーが発展して行くと同時にその恋愛関係も深くなっていく。作家はラブストーリーが多くの脇筋を取り入れながら、二人の恋愛関係をその小説の芯としなければならない。感情的なレベルで満足するような楽観的な結末というのは、二人の関係が好転するために、色々な要素を乗り越えなければならないが、結果として無条件の愛が報いられる。<sup>4</sup>

言い換えると、ロマンス小説においては愛は勝つことが保証され、読者と作家の間にストーリーは絶対にハッピーエンドで終わるといような「約束」が生まれる。

その「約束」は読者にとって重要なものであり、「恋愛」と関連する作品を読むと、すべて当然そういう結尾になると考えるようである。同時に、楽観的な口調で書かれるものを予期するが、作者や出版社はその期待に応じて次々と新しいロマンス小説を販売する。簡単に言えば、ハッピーエンドが嫌いな人がほとんどいず、またはどんな人でも恋をしている或は恋をしたことがある、または愛したいか愛されたかという前提で「恋愛」を売り物にしていると言えるが、その作戦は大成功で、ロマンス小説は莫大な人気があるジャンルとなっている。最近の統計によると、2007年に、ロマンスフィクションは、およそ8,090のタイトルで出版され、売り上げは13億7500万ドルに上った。多くのロマンス小説はニューヨークタイムズなどのベストセラーリストに載せられ、全体的にベストセラーの第二の地位を納めた。そして本を読む人々の5冊の中に1冊、ロマンス小説であるほど、莫大なフィクションカテゴリーとなった。<sup>5</sup>

日本の恋愛小説の売り上げデータはいいにくまだ発表されていないようであるが、二十一世紀に入ってから、小さな、静かなブームを味わって

いることは確かである。斎藤美奈子の「L文学宣言」<sup>6</sup>、つまり「Lにはレディ、ラブ、リップ等の意味が含まれて」いる文学の宣言は『鳩よ』に発表され、その中に「ザ・恋愛小説」、「恋愛のウソとマコト」などという題名で色々作品が取り上げられた。その影響で恋愛小説への関心が高まったようである。そしてまた、恋愛小説はあらゆる本屋の棚に並べてあって、主な文学賞を獲得することが目立っていた。代表的な作品の例を二三冊あげると、山本文緒の『プラナリア』は2000年に直木賞、川上弘美の『センセイの鞆』が2001年に谷崎潤一郎賞、唯川恵の『肩ごしの恋人』が2001年の直木賞、大道珠貴の『しょっぱいドライブ』が2003年に芥川賞を与えられた。しかも、このブームは現在に至るまで続いているようである。恋愛小説のリストが増えるだけではなく、携帯恋愛小説という新しい分野も登場した。

このように恋愛小説の数は増え、様々なモチーフ、背景、人間関係が描かれるが、統一されているのは言うまでもなく「恋愛」というテーマである。しかし、恋愛小説を定義するのにそれだけでは足りず、他に共通点が、例えばロマンス小説にとって不可欠の「ハッピーエンド」があるかどうか、考えるべきであろう。そこで小論はその数えきれないほどある恋愛小説への理解の第一歩として、ロマンス小説の基準を参考にしながら、代表的な女性作家、川上弘美、小池真理子、篠田節子、乃南アサ、吉本ばななの作品を収録している『恋愛小説』<sup>7</sup>を考察してその問題を追って行く。

その短編集に載せられている作品を順番で考えると、まず、川上弘美の「天頂より少し下って」がある。靴屋で働いている、十一歳年下の男と関係する女性の話で、悲観的な雰囲気が出るストーリーである。一番最初から、主人公、真琴は恋愛の相手、涼について次のよう考える。

すいぶん涼のことが好きだったな、と真琴は思う。思ってから、自分がいつの間にか過去形で考えていることに気づく。すいぶん涼

のことが好きだな。頭の中で、いそいで真琴は言い直す。(9)

成人した息子を持ち、離婚した真琴は恋人への気持ちがあはつきりせず、彼との関係は過去のものであるように言う。又は最後までその関係が深まるかどうか明確ではない。真琴は結局、「恋ってほんとにそんなにいいものなのか」(13)と悩み、そして、相手に惹かれたところは「年齢よりも落ち着いた声だった。深い、声だった…不思議な声」(10)だけが明らかになる。一緒にいる時、相手はお酒を飲まないのに、真琴はいつも酔っている。そしてまたストーリーの中に、二人の関係は長く続かないと思わせるところが幾つかある。「いつまでこの恋は続くのかな。真琴は思う」(36)とはつきり書かれ、そして二人の熱い関係はそろそろさめるだろうということは「もうすぐ冬がくるのだ」(21)というような言葉で暗示されている。

「天頂より少し下って」では真琴と涼との関係が続くようであるが、最後まで彼女への彼の気持ちが書かれていない。つまり、この恋愛小説の中心となるはずの関係の行方も明確ではない。読者が分かることは、二人がよくバーやラブホテルへ行くことである。しかも、ストーリーの終わりに、真琴の気持ちは突然のように息子の真幸に向けられ、一緒にウィスキーを飲みながら親子は彼の悩み、つまり、ガールフレンドにふられたことについて話し合う場面になる。結論として、真琴は息子と初めてコミュニケーションができ、その瞬間を保ちたい気持ちが何よりも強い。しかし、恋人の涼を忘れた訳ではなく、ただ息子への思いと混乱しているようである。「真幸が好き。真琴は思う。涼も好き。つづけて思う。不埒だな、あたし。不埒で、女で、むきだしで」(35)と書かれ、真琴は月を見ながら嬉しそうに考えていると描写されている。

このように、ストーリーの終わりに、真琴は感情的なレベルで満足するようになるが、それは人を愛したいという願いが叶ったからである。輝い

ている月の下で真琴は次のように考える。

全身全霊をかけて愛されることなんて、あたし、ぜんぜん望んでいない。真琴は思う。そうではなく、あたしの方が全身全霊をかけて愛したいのだ。(15)

そこでロマンス小説の定義を考えると、この作品の女主人公は感情的なレベルで満足しているようであるが、その結末が楽観的かどうかは、別の問題であろう。「天頂より少し下って」という題名で暗示されているように真琴は一般の人と少し違っても、愛の対象は恋人ではなく、息子だとすれば、読者はこの終わり方をどう受け取るべきであろう。確かに自信を持つようになり、自分の人生をどう歩むかコントロールしているようなので、「危険な男と冒険好きな女」という本の中に、ジェイン・クレンツが言うような、「ロマンス小説に見られる、女性を祝福する力」<sup>8</sup>を示しているようでもある。しかし、ロマンス小説のハッピーエンドが必要とする、「ひざまずいた男が女への愛の宣言、又はプロポーズする、或はその女にさせられる」<sup>9</sup>のような結末が見られないので、この恋愛小説はロマンス小説の定義から遠く離れているものである。その反面、この相違点、即ち、「ハッピー」ではなくても「サーティスファイン」つまり、満足感がある終わり方になり、そこで日本的なもの、即ち恋愛小説の特徴の一つが表れているのではないかと思われるので、興味深い。

「天頂より少し下って」と同じように小池真理子の「夏の吐息」にはロマンス小説の特徴がいくつか見られるが、六年前に行方不明になった恋人への妙子という女性の想いがストーリーの中心である。それは「昌之、あなたがいなくなって六度目の夏が巡ってきました」(45)という小説の書き出しで明らかになる。書き方は漠然とした日記のようなもので、主人公、妙子は相手の男に語りかけているという形でもある。その「日記」に書かれていることによって、二人の関係がだめになるのが時間の問題で、そして妙子だけそれを理解

していない、という二つの点が読者によく伝わる。例を挙げると、妊娠した時、子供を降ろさなかった理由は妙子が次のように説明する。

実際に産婦人科の入り口まで行ったことさえありました。途中で帰ってきたのは、赤ん坊を降ろしてしまった、と知った時のあなたの顔が目に浮かんだからでした。(58)

そして、もし降ろしたとすれば、彼は失望して「俺がどんなに…どんなに俺たちの子を楽しみにしていたか、分からないのか」(59) などと言うだろうと想像する。しかし、現実として、彼は妊娠していると聞いて、二週間後、姿を消し、妙子の想像しているものをすべて否定する。結局、妙子は流産して、籍に入っていないのに彼の実家に住むことになるが、彼の母親さえ、彼は戻ってこない、自分の人生を楽しく送るように妙子に進める。しかし、それでも彼女はいつまでも彼の帰りを待つと覚悟する。

二人とも役者で、妙子は彼と一緒に見た『ひまわり』<sup>10</sup>という映画の主人公の役を現実演技していることが少しずつ明らかになる。その映画は戦争で行方不明になった兵士をずっと待つ女のストーリーであり、それを見た時の昌之の言葉は現実にある二人の関係が本当は非現実的であると暗示している。「全部、映画のスクリーンの中に観てるだけ、みたいに感じられること、ってない？」(65-66) と彼が言い、続いて、次の言葉を加える。

例えばさ、俺と妙子がキスするだろ？その時、妙子にキスしてる俺をもう一人の俺が観客のように眺めてるんだよ。ただ眺めてるだけなのに、俺の唇はちゃんと妙子の唇の感触を捉えてて、キスの味をして、いつもと同じように感じちゃったりもしてるんだ。それなのに、そういう光景を俺自身が眺めてる…そんな感じの状態だよ。(66)

何年も経ってから、妙子もその言葉の意味が理解できるようになるけれど、それでも相変わらず彼を待つことにする。『危険な男と冒険好きな女』の

中に「ロマンスがファンタジーであり、そして他のジャンル・フィクションと同じように、…理想的な世界が書かれて」いる<sup>11</sup>と指摘されているが、小池真理子はそのファンタジーを、作品自体というより、主人公の想像世界、つまりストーリーの中のストーリーによって作り上げている、とも言える。

この作品に見られる、もう一つ興味深いテクニクはストーリー、そして主人公の成長を進展させるために、作者は無言電話を三回利用することである。一回目、妙子は昌之の実家に行ったばかりの時に、元のアパートから転送されたか実家に直接かかってきた電話、または相手が誰であるか分からないまま、妙子は自分の状況、彼の実家へ引っ越し、子供を流産したことなどを細かく説明する。そして、最後に次の言葉で彼の心に訴えるようにちょっとヒステリっぽく話す。

…帰りたくなったら、どっちでもいいから帰ってきて。お願い、昌之、帰ってきて。それからね、昌之、悲しい知らせよ。私たちの赤ちゃん、死んじゃった。流産しちゃったの。ごめんね、昌之。あんなに楽しみにしてくれてたのにね。(76)

二度目の電話の場合は、アパートを引き払って彼の実家に引っ越し時で、もう少し冷静に話す。

ちょうどよかった、昌之…。私はあなたのお母さんのお店、手伝いながら暮らしてる。お母さんと一緒にあなたを待ちながら、静かにくらして(いる)。(76)

一回目も二回目も相手は途中で電話を切るけれど、五年を経てからかかってくる三回目の電話の場合は妙子が流産した子供が生きていればと話すところで、相手の吐息が聞こえてくる。そこから「夏の吐息」という題名が生まれたのだろう。三回目の電話主はやはり昌之と勝手に決め付けてはいるものの、妙子は最も落ち着いていた時でもある。その電話の後に、次のように考える。

三日前、あなたの吐息を耳にしてから、私

はずっと、自分自身に問いかけてきました。自分は何がしたいのだろう。あなたを待ちながら年を重ね、死んでいくことを本当に受け入れられるのか…いつ帰って来るのかわからない、死んでもいるのかもしれないあなたをどれだけ待っていられるのだろうか… (80)

しかし、やっと自分の状況を理解しているようになり、「でも、昌之、私は待つと思うのです。この先も永遠に待ち続けると思うのです」(80)と妙子は言い加える。そこで、妙子は三杯目のウィスキー・ソーダを飲みながら、涙ぐんでいる状態でストーリーが終わる。

「ハッピーエンド」ではないにしても、妙子は自分で自分の人生を決めているということは重要である。『永遠の喜び、レイプ、ロマンスと女性の想像力』という本の中で、ヘレン・ハゼンが指摘するように、「ロマンス小説の主人公はいつも自分の意志が強い」<sup>12</sup>、そして、クレンツが言う「ロマンス小説は女性の力の祝福」でもある。従って「夏の吐息」にロマンス小説と共通する点があるとすれば、妙子がいつまでも待つということである。つまり、自分の意志、自分の力で自分の人生をコントロールしているということである。その点では感情的なレベルで満足し、楽観的な結末になり、そして、その終わり方は何よりも「天頂より少し下って」と同じように「サーティスファイン・エンド」であることに注目するべきであろう。

続いて、篠田節子の「夜のジンファンデル」は、ある意味で、典型的な浮気物語である。夫婦で海外旅行を計画した絵美の夫は突然行けなくなり、一人旅になる。行き先のサンフランシスコに単身赴任している友人の夫を訪ね、一晩一緒に過ごす。四年後に再会するところで、彼は愛の告白をする。昔、彼女と浮気したが「怖かった」と言い、そして、その理由は「あの年齢で離婚でもされたら、ダメージは計り知れない。少なくとも役

員昇格の目はなくなる。自分が築き上げてきたものと、自分の将来を考えたとき、軽率な行動は取れなかった」からだと説明する。それから「今は何も怖いものがないから、この際、言いたいことを言っておく」と言い加え、「好きだよ。ずっと。何年も前から、今も、この先も。」(110-111)と心を打ちあける。絵美はもちろん喜ぶけれど、「私はこわいものがあるときにこそ、好きだと言ってほしかった」(113)と答える。簡単に言えば、彼女は男に告白させ、その状況をコントロールする、ロマンス小説に登場する強い女だと言える。

そこで、相手の男はドバイに転勤し、テロリストの襲撃によって殺されるので、ハッピーエンドではないと思われながら、相手がなくなっても心の中でずっと愛し続けるという、ジョン・カウエチが『冒険、ミステリー、とロマンス』という本の中で名付ける「高級なロマンス小説」<sup>13</sup>と似ている形になる。「夜のジンファンデル」は愛する男に出会った時と同じように、ジンファンデル葡萄の白い花が咲き、絵美は次のように考えている場面で終わる。

青白い月明かりが、つい十ヶ月前のあの夜と同じように、葡萄の茂みに濃い影を作っている。紛れもない、彼の気配を感じた。どこにいるかというのでもない。そこかしこにいる。(115)

強い女、永遠の愛、そして主人公は感情的なレベルで満足する結末が揃って、この短編集の中で、「夜のジンファンデル」はロマンス小説に最も近いものとなる。と言っても、「ハッピー」ではなく、やはり「サーティスファイン」な終わり方であり、前述の短編と共感するような要素を示している。

『恋愛小説』の短編集には乃南アサの「アンバランス」が次となるが、昇進を目指しているサラリーマンと同棲して、不満を抱えている元OLの話である。暇がいっぱいあって、幸せになっているはずの瞳子は、いつも彼が会社へ出かけるたびに「残されたのは、鉄製の玄関ドアが閉じられる

ときの、ばん、という重々しい音」だけ聞こえる。そのために「独り残された自分が、まるで真空パックに閉じ込められたみたいに息苦しく」(120)なる。彼が帰ってくるのを待っている間、退屈で、「秋(つまり別れる季節)が深まるにつれて」(121)、「倦怠期なのかもしれない」と瞳子は考える。悩んでいるうちに、アパートの周りから変な音が聞こえるようになり、不安だらけの生活に落ちこむ。しかし、彼にいくら話しても相手にしてくれないので、「秋が、日増やしに深まって行く」(136)と別れることを決心する。だが、その途端に彼はアパートの様子が実際に変だと分かり、謝るために、瞳子は彼を許すだけではなくいつものように、「ばん、と鉄の扉が閉められ...一人で残されて、それでも。。もう息苦しさを感じ」なくなる(158)というところでストーリーが終わる。

再び幸せに暮らせると暗示されているので、いわゆるハッピーエンドの一つであるとも言えるかもしれない。しかしながら、ストーリーの始まりから「アンバランス」という題名のようにずっと精神的に不安定な状態にいる主人公はそんなに簡単に気持ちを切り替えることが出来ようか。一時的に満足しても、元に戻る可能性もある、と読者は考えるに違いない。主人公は強い女に見えないが、現代的なロマンス小説と同じように、二人の恋愛関係が展開してくのに、色々な問題を乗り越えなければならない。しかも、女性が抱える社会的な問題を提起している作品の一つでもある。クレンツによると「ロマンス小説の表紙の裏に女性の立場から色々な社会的な問題が描かれている。それは、キャリア対結婚、母子家庭、鬱病、離婚、浮気…」<sup>14</sup>などである。しかし、それでもロマンス小説は言うまでもなくラブストーリーが主要なものである。「アンバランス」の場合は恋愛関係より鬱病の世界を中心に描いているので、その特徴はロマンス小説の基本的な要素との違いを示している。その上、「ハッピーエンド」だと言っても、

二人で幸せになるというよりも、主人公が恋愛対象者にやっと相手にされるという満足感が強調されていることが恋愛小説においては重要であると言える。

最後に吉本ばなの「アーティチョーク」を考察するが、ラブストーリーだと言っても、女主人公「私」の心の中に恋人より最近なくなった「おじいちゃん」への想いが中心となっているので、ある意味で不思議な恋愛小説である。その祖父は「ウイスキーとともに生きた人だった」と描写され、主人公は恋人や、祖父よりも、ウイスキーを大事にしているように思われる。それは「おじいちゃんが飲んで見つめている夜のベランダの向うには無限の、ニアガラの滝でもかなわないような大きな世界があった」、そして「お酒はその無限をひきたてるための魔法の液体だった」(85)からである。彼女がお酒を飲む理由もその大きな世界を見たいということである。小説の三分の一くらいに入らないと恋愛の相手が紹介されないが、それは次の言葉となる。

この春先、ずっとつきあってきた恋人が、ニューヨークに転勤することになった。

彼の会社はNYに支社があり、そこから今度日本に帰ってきたらきっといづらかえらくなれるのだろう。

でも、それっていつなのか?という感じだった。きっとかなり先のことだろう。私もそのころは三十を過ぎているだろう。

歳は別にどうでもいいのだけれど、私は彼との関係に限界を感じていた。

彼の仕事が忙しくなりすぎて、少し関係がかわってきていたのだった。(173)

こうして彼女は住んだことも行ったこともない、ニューヨークに暮らしたら、何をすれば良いか分からない、などと悩み、一緒に行かないことにする。しかも、あれこれを考えている時、いつもウイスキーを飲み、祖父のことを思い出す。バーで飲む時、「男みたいな注文の仕方」(177)また

は飲み方であるので、主人公の強さが暗示されている。だが、彼女の本当の力は自分の人生を自分で決めよう、コントロールしようとするところにある。

しかし、その反面、彼女は現実より妄想、理想の世界を望むのが明らかでもある。結局、「アーティチョーク」の主人公は自分の力を発揮するためにその夢から目をさますことが重要である。相手の男はただの“サラリーマン”と描写され、彼の実像が描かれていない。飛行機の中で出会った彼と色々な旅行している時、「幸せだなあ」と考える主人公は、相手が仕事が忙しくなり、一緒に旅行が出来なくなると、次の気持ちになる。

あの（幸せな）とき私が見たいのは、彼自身だったのか、それとも恋愛の妖精が見せてくれた幻…私の幸せという概念に彼の面影がたまたま映っただけだったのか…（183）

主人公はもう一回現実に向かわなければならないが、それは彼女が抱く祖父と祖母との理想的な恋愛関係のイメージが母親の言葉で壊される時である。主人公の一言「おじいちゃんとの思い出にひとつついやなことはないもの」に対して、母親が次のように言う。

そうか、あんたはそうよね…私なんか自分の親だからね、やっぱりそうはいかないわよ。浮気しておばあちゃんを泣かせたこととか、仕事ばかりでちっとも私のことかまってくれなくて、入学式にも来てくれなかったし、けっこう複雑よ。あんたはおじいちゃんのいい時代に、いいふう知り合ったんだね。人それぞれ、近いようとお会い方は違うからね。（186）

そう言われて、主人公は彼と関係を見直し、一緒にニューヨークに行かなくても彼と仲良くして、その内一緒になるという可能性が残されたままで小説が終わる。二人の関係を次のように振り返ってみる。

そうしてまるでアーティチョークみたいに、

人生には必ずちょっとした苦味があって…  
今の私にとって、目の前のクラスの中の氷は長い時をこえてきた水晶に、そしてウィスキーはこのひととき（彼との短い恋愛歴史）を閉じ込める美しく琥珀に見えた。（198）

楽観的な口調で書かれていながらも、結局、彼の恋愛関係は一緒に楽しく旅行したということしか明らかではない。その上、最後に離ればなれになる。しかし、主人公はとても満足しているように描かれるので、前述の恋愛小説と同じようにやはり「サテイスファイン・エンド」で終わるのが注目すべきであろう。

こうして、『恋愛小説』という短編集に入っている五つのストーリー、靴屋で働いていた、息子と同じような年齢の十一歳年下の男との関係、ある日突然姿を消した夫への想い、友人の夫と浮気した人妻、四年同棲している男性との関係で悩む、精神的に不安を抱える女性、そして「おじいちゃん」の理想像に執心する女を考察すると、どれにも西洋のロマンス小説に不可欠の結尾が表されないと言える。つまり、絶対的となる、男と女が一緒になって、愛を告白する（特に男の方から）、そして一生幸せに暮らすというようなハッピーエンドが見られない。しかし、西洋のロマンス小説との共通点がないわけでもない。

まず、作者、または主人公が全員女性であり、クレンツが言うような「男性の社会に生きる女性のプライベートな関心事に対応ファンタジー」<sup>15</sup>も描かれている。そして、主人公を通して何か社会的な問題を抱えているストーリーとなっている。しかも、伝統的な女性の役割、即ち妻、母親などの役割を果たすのではなく、自分の歩む道を選ぶとするので、多くのロマンス小説と同じように「家長制度の権力構造をひっくり返そうとしている」<sup>16</sup>とも言える。そしてまた、『ロマンスの哲学』の中にスーゼット・マコがいうように「ロマンス小説によく見られるやさしい力」<sup>17</sup>によってそれを発揮する。

しかし、そのような条件が揃っても、ハッピーエンドの問題が残る。先に述べたように、ここで取り上げている恋愛小説の終わり方はロマンス小説の定義に当てはまらないが、それがロマンス小説と恋愛小説の最大の相違点となる。その違いは文化的なものから生じると言えよう。日本ではロマンス小説よりも「サテイスファイン・エンド」で終わる恋愛小説が売れていることがその証であろう。結局、『ロマンス小説の読本』の中にジャンス・ラジュエーが指摘するように読者にとって「ロマンス(恋愛)の意味よりそのロマンス(恋愛)を読むこと自体」<sup>18</sup>が重要性を示し、「ロマンス小説を読むと、ストレス解消となり、憤りを和らげる」<sup>19</sup>ことになる。恋愛小説の莫大な人気や絶え間なく売れることを考えると、同じように日本の読者を癒していると思われる。

最後に日本文学における、恋愛小説の地位について、少し触れると、ロマンス小説と同じように高く評価されていない場合が多いにも関わらず、大変な人気がある。その点に関してクレンツが次のように述べている。

飛行機の中でロマンス小説を広げることがどれだけ勇気がいると分かる人が少ない。ロマンス小説になると、一般社会はいつもその文学だけではなく、読者に対しても判断を下す。

そして、その結果はいつも同じ。一般社会はロマンス小説を読むことに賛成しない。その本はゴミで、読者は知性の足りない、無学、世間知らず、またはノイローゼの人だと決めつける。

長い間厳しく批判されても、多くの女性がロマンス小説を読んで楽しむということ自体は女性の勇気だけではなく、そのジャンルの魅力を証明する。<sup>20</sup>

恋愛小説は大衆文学の枠に入るものがほとんどであるために、堂々と読むのが勇気がいるかもしれない。しかし、よく考えてみると、『源氏物語』

はその時代の大衆文学でもあった。日本の恋愛小説の地位は時間が経つとともに決まるが、今は莫大な人気ジャンルに違いない。つい最近、ニューヨークタイムズに小説の人気についての記事が載っていたが、その中に「不景気の時、人間はハッピーエンドを望む。本屋も読者を引き寄せるのに苦勞する時代でありながら、ロマンス小説は他のカテゴリより売れている」<sup>21</sup>と書かれている。日本の場合は同じ傾向が見られるかどうか楽しみである。

(注)

- 1 Harriett Hawkins. *Classics and Trash: Traditions and Taboos in High Literature and Popular Modern Genres*. Toronto: University of Toronto Press. 1990 p. xiii.  
... art not only tends to give its patrons what they want, but also acts as a creator of the culture by which it was created.
- 2 Kyoko Yashiro. *Forward in David Matsumoto's The New Japan: Debunking Seven Cultural Stereotypes*. Intercultural Press. 2002.  
There is convincing evidence from current studies and surveys that show that generalizations made from previous works about Japanese people and culture no longer hold with younger generations ... Japan is evolving into a society with a different culture.
- 3 "Introduction" John Whittier Treat. *Contemporary Japan and Popular Culture*. Honolulu: University of Hawaii Press. 1996. p. 3.  
A failure to engage Japanese popular culture, commercial culture ... will mean a failure to take Japan seriously.
- 4 Romance Writers of America. <http://www.rwanational.org/5/2009>.  
Two basic elements comprise every romance novel: a central love story and an emotionally-satisfying and optimistic ending:  
A Central Love Story: The main plot centers around two individuals falling in love and struggling to make the relationship work. A writer can include as many subplots as he/she wants as long as the love story is the main focus of the novel.  
An Emotionally-Satisfying and Optimistic Ending: In a romance, the lovers who risk and struggle for each other and their relationship are rewarded with emotional justice and unconditional love.



- 5 同ホームページ  
Romance fiction generated \$1.375 billion in sales in 2007. Approximately 8,090 romance titles were released in 2007.  
(Romance fiction was the) "biggest fiction category of them all" in 2007 ... the books hit the *New York Times*, *Publishers Weekly*, and *USA Today* best-seller lists.  
The romance category was number two (based on consolidated ranking across the best-seller lists).  
Of those who read books in 2007, one in five read romance novels.
- 6 斎藤美奈子。「L文学宣言」『鳩よ〜』2002年5月号。その後、『L文学完全読本』に納める。マガジンハウス。  
2002年12月。
- 7 『恋愛小説』新潮社。2005。「天頂より少し下って」、「夏の息」、「夜のジンファンデル」「アンバンランス」、「アーレイチョーク」からの引用はすべてこの本からである。小論で引用のページを示す。
- 8 Krentz, *Dangerous Men and Adventurous Women*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 1992.  
(Romance novels) include celebration of feminine wisdom and power. p. 16
- 9 同上書。p. 127  
(In Romance novels, the happy ending requires that the hero is quite literally brought to his knees to propose marriage and declare his undying love.
- 10 *I girasoli (Sunflower)*. Directed by Vittorio De Sica. Starring Sophia Loren and Marcello Mastroianni. Compagnia Cinematografica Champion. .1970.
- 11 同上書。p. 99  
Romance is a fantasy, and like all genre fiction it reflects the world as we would like to see it.
- 12 Helen Hazen. *Endless Rapture, Rape and Romance and the Female Imagination*. New York: Charles Scribner's Sons. 1983.  
She (heroine of romance novel) always has a mind of her own. p. 3
- 13 John G. Cawlti. *Adventure, Mystery and Romance Formula Stories as Art and Popular Culture*. Chicago and London: The University of Chicago Press. 1976.  
Though the usual outcome is a permanently happy marriage, more sophisticated types of love story sometimes end in the death of one or both of the lovers, but always in such a way that the love relation has been of lasting and permanent impact. p. 42.
- 14 Krentz. 同上書。p. 69  
... other themes examined from a feminine perspective
- under the covers of romance include career/marriage conflicts, single motherhood, clinical depression, divorce, adultery, impotence, infertility, incest, child abuse, wife-beating, tug-of-love custody battles, gang rape, widowhood, workaholic behavior, alcoholism, prostitution, drug addiction, war and its aftermath, recently surrogate motherhood, anorexia, and mastectomy.
- 15 同上書。p. 68  
Romance offers fantasies that address the sometimes intimate concerns of women in a male world
- 16 同上書。p. 5  
Romance novels invert the power structure of a patriarchal society because they show women exerting enormous power over men.
- 17 Suzette L. Mako. *Romantic Philosophies*. <http://ourworld.compuserve.com/homepages/smako/def-root.htm>.  
Romance has always known the gentle strength of women.
- 18 Janice A. Radway. *Reading the Romance. Women, Patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press. 1984. p. 86  
(early interviews were interesting because they focused on so resolutely) on the significance of the *act of reading* rather than on the meaning of the romance.
- 19 同上書。P. 95  
(these women believe) romance reading enables them to relieve tensions, to diffuse resentment ... .
- 20 Krentz. 同上書。p. 1.  
Few people realize how much courage it takes for a woman to open a romance novel on an airplane ... When it comes to romance novels, society has always felt free to sit in judgment not only on the literature but on the reader herself.  
The verdict is always the same. Society does not approve of the reading of romance novels. It labels the books as trash and the readers as unintelligent, uneducated, unsophisticated, or neurotic.  
The fact that so many women persist in reading and enjoying romance novels in the face of generations of relentless hostility says something about women's courage but about the appeal of the books.
- 21 Rich Motoko. *Recession Fuels Readers' Escapist Urges*. In *New York Times*. April 7, 2009.  
In a recession, what people want is happy ending. At a time when booksellers are struggling to lure readers, sales of romantic novels are outstripping most other

categories of books.

参考文献：

- Cawlti, John G. *Adventure, Mystery and Romance Formula Stories as Art and Popular Culture*. Chicago and London: The University of Chicago Press. 1976.
- Hawkins, Harriett. *Classics and Trash: Traditions and Taboos in High Literature and Popular Modern Genres*. Toronto: University of Toronto Press. 1990.
- Hazen, Helen. *Endless Rapture, Rape and Romance and the Female Imagination*. New York: Charles Scribner's Sons. 1983.
- Krentz, *Dangerous Men and Adventurous Women*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 1992.
- Mako, Suzette L.. *Romantic Philosophies*. <http://ourworld.compuserve.com/homepages/smako/def-root.htm>.
- Matsumoto, David. *The New Japan: Debunking Seven Cultural Stereotypes*. Intercultural Press. 2002.
- Rich Motoko. *Recession Fuels Readers' Escapist Urges*. In *New York Times*. April 7, 2009.
- Radway, Janice A. Radway. *Reading the Romance. Women, Patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press. 1984. p. 86
- 『恋愛小説』新潮社。2005.
- Romance Writers of America. <http://www.rwanational.org/5/2009>.
- 斎藤美奈子。「L文学宣言」『鳩よ〜』2002年5月号.
- Whittier Treat, John. *Contemporary Japan and Popular Culture*. Honolulu: University of Hawaii Press. 1996